

# 一の谷中世墳墓群の背景としての遠江国府

石井進

## はじめに

- 一 見付国府の成立まで
- 二 鎌倉期の見付国府
- 三 南北朝期の見付国府

## おわりに

### 論文要旨

静岡県磐田市見付は、古くからの遠江国府の所在地であり、中世にもこの地域の中心をなす「中世の地方政治都市」であった。一九八四年、この町の西北に位置する丘陵の尖端部一帯から合計九百近くの中世墳墓が密集して発見された。所在地の地名をとって、一の谷中世墳墓群と通称されている。遺跡保存をねがう多くの人びとの努力にもかかわらず、住宅地建設のためにその姿の永久に消滅してしまったことは痛恨の至りであるが、保存運動の過程で墳墓群自体や、それと密接に関連し、歴史的背景をなしていた見付の町の研究が大きく進んだことは確かである。中でも義江彰夫氏の労作「国府から宿町へ——一の谷遺跡を手懸りに見る中世都市見付の構成と展開——」は、見付の歴史を長期にわたり、多角的にあとづけた代表的論文といえよう。

本稿はそれらの研究に学びつつも、その後刊行された『静岡県史資料編』(磐田市史史料編)、あるいはその他の新史料を参考しながら、あらためて古代か

ら中世にかけての見付国府と町の歴史を再検討し、かつて發表した私見の誤りをも正そうとした試みである。とくに南北朝期の遠江公領の分布状況を再検討した結果、公領は当時もなお国内の中央部を中心になりの面積をもつて拡がっていたことを確かめるとともに、見付の国府はまさにその中心ともいいうべき好位置にあつたと指摘した。そして見付は当時もなお公領經營の拠点ともいるべき役割を果しており、地方都市としての見付は単なる東海道上の一宿駅というだけではなく、相当に広大な公領の經營の中心としての機能からも説明されねばならないと主張した。

そして中世後期の見付が、従来、自由都市として高く評価されてきた点についても、「中世の地方政治都市」であるが故にそうした特性をもちえたのではないか、との見通しを述べて全体の結びとした。